Hyogo Prefectural Ashiya International Secondary School Journal

３月の芦国

Respect Integration Contribution

令和２年３月３１日発行

第12回卒業式　　3/2（月）

新型コロナウイルス感染拡大により、３日に予定されていた卒業式は、１日早め実施しました。卒業生と教職員、保護者のみの出席とし、国歌や式歌を歌わない、送辞はビデオ上映にするなど、プログラムの変更をし行いました。シンプルな中にあって、１つ１つのプログラムが輝く式となりました。特に、卒業生代表の三宅さんが、美しい答辞をしてくれました。

やわらかな日ざしが心地よく、うららかな春の訪れを感じる今日、私たち12期生71名は芦屋国際中等教育学校を卒業します。

6年前の春、私たちはここで出会いました。何カ国もの国旗が並べられたこの体育館で行われた入学式。入学式で呼ばれていく名前はどれも聞いたことの無い長い名前ばかりで、これから始まる学校生活も、とても長いもののように感じていました。ですが、6年が経った今日、この場で呼ばれた名前はどれもかけがえのない大切な名前になりました。

いつからか、この学校に通い、このメンバーと過ごすことは当たり前になりました。しかし当たり前になってもその日々が特別であることは６年間変わりませんでした。

時には多言語を難なく話せる友達や、スポーツ万能の友達、自分の夢をしっかり持っている友達を見て、なんのとりえもない自分に苛立ったり、落ち込んだりすることもありました。1年生からはじめた吹奏楽部でも、人と自分を比べて、純粋に音楽を楽しめない時もありました。

けれどもこの学校で、12期のみんなや、先生方、先輩、後輩とさまざまなことに挑戦していく中で、みんなが違うからこそそれぞれの個性がよりいっそう輝き、ひとつの大きな光になるのだと気づきました。

そして、人と自分を比べるのではなく、自分は自分らしく前に進めばよいのだと思えるようになりました。

「楽しむ側ではなく、楽しませられる側になろう」と、放課後ぎりぎりまで残って準備した文化祭。勉強と両立させながら夏休みも集まって練習し、みんなで仕上げた体育大会の学年演技。ドッジボールになると人格が変わるほど本気になり、最後まで強さを貫いたスポーツ大会など、様々な行事がありました。行事の度にもめたよね。本番一週間前になっても意見がすれ違い、まとまらなくて、最後までどうなるのかといつもハラハラしどおしでしたが、それでも本番では最高のパフォーマンスを発揮するのが12期でした。

他にも沖縄への修学旅行やニュージーランドでの研修旅行など、たくさんの忘れられない思い出があります。

ですが、今、私が一番に目に浮かんでくる光景は、皆と過ごした芦国での何気ない日常の一コマです。遅刻ギリギリで登校してくるいつものメンバー。休み時間に食堂のからあげの匂いが充満する教室。体育の前の授業のそわそわ具合や、下校時刻ぎりぎりまでしたおしゃべり。そんなお世辞にもかっこいいとは言えないような日常が今では愛おしく思えます。いつまでも続くような気がしていたこの日々が、今日で最後だということが本当に信じられません。楽しいときも辛いときもいつもみんなと一緒でした。時には悩んだり落ち込んだりすることもあったけれど、12期のみんなとだったから、今日笑顔でこの日を迎えることができました。本当にありがとう。

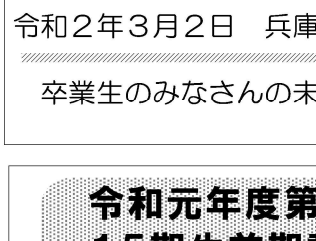
この学校に入学する前に、芦屋国際中等教育学校のホームページで「多文化共生」という言葉を見つけました。その時は、この言葉の「異文化を理解し、尊重しあって共に生きる」、という意味があまり理解できませんでした。

この学校で6年間を過ごした今、私はこの「多文化共生」という言葉の意味をほんの少しだけ理解できたような気がします。

それは、決して難しいことなんかではなくて、相手の事を信頼し、信頼してもらう、そんな人と人との基本的な関係を築くということなのではないかと思います。そしてその人間関係を築いていくことに国籍や性別、文化的背景の違いは関係ない、ということを日々の生活や部活動を通して強く感じました。

今、世界では様々な問題が起こっています。私たちを待ち受けるのは決して明るい未来だけではありません。

この「芦国」という小さな世界で6年間を共に過ごしてきた私たちは、これから、世界のさまざまな場所へと羽ばたいていきます。時には、国家間のいざこざや心ないニュースなどに戸惑うことがあるかもしれません。情報が溢れかえるこの社会で、何を信じればいいのか分からなくなることがあるかもしれません。それでも私たちがこの学校で培ってきた関係とこれまでの経験はこれからもずっと変わることはありません。



We come together to create a new age

校歌の三番にもあるこの言葉。世界の流れをただ傍観するのではなく、未来は私たちが共に創っていくのだという思いを常に持ち続けたいと思います。

このような素晴らしい環境で6年間を過ごすことができたのは先生方や事務の方々のおかげです。どんな時もそばで私たちを支えてくれた先生方。

疑問や不満をすぐにぶつける私たちに、先生はいつも寄り添い一緒に問題を解決していってくださりました。こんなにも素敵な先生方に出会えた私たちは幸せ者です。6年間本当にありがとうございました。

在校生のみなさん、自分の周りにいる人を大事にし、時に頼り、支え合いながら毎日を大切に過ごしてください。６年間は本当にあっという間です。芦国生でいることに誇りを持ち、卒業まで思いっきり楽しんで下さい。そして、芦国らしさを守り続けるのではなく、これからの新しい芦国を創っていってください。

最後に、お父さん、お母さん。これまで、迷ってばかりの私たちのことを信じて、支えてくれて本当にありがとう。まだまだ頼ってばかりですが、これからも頑張ります。ずっと見守っていてください。

ずっとみんなと一緒にいたいけれど、次のステージへと進むときがきました。

それぞれの夢に向かって、芦屋国際での６年間を胸に今日私たちは新たな一歩を踏み出します。

育ってきた環境や価値観が違う仲間が集まるこの学校は、一方では世界の縮図のようでありながら、また一方では、安心して身をおくことのできる家のような場所でした。芦国に入学し、12期生として過ごした6年間は私にとって本当に大切な宝物です。

最後にもう一度。12期のみんな、今まで本当にありがとう。

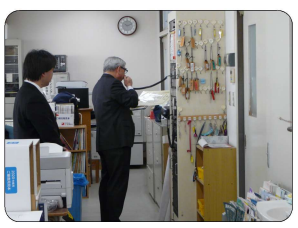
そしてこれまで私たちを支えてくださった全ての方に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

12期生のみんながこれからもそれぞれの場所で自分らしく輝き続けること、そして芦屋国際中等教育学校が、一人一人の輝きで、さらに光満ち溢れる学校になっていくことを願って、答辞とさせていただきます。

令和２年３月２日　兵庫県立芦屋国際中等教育学校１２期生代表　三宅珠代

卒業生のみなさんの未来に幸多からんことを、心から祈念します。

令和元年度第3学期終業式
15期生前期課程修了式　　3/23（月）



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、終業式は、各教室で放送を聞く形で行いました。

終業式後、１５期生は前期課程の修了式を行いました。野村先生から、初心に帰り芦国にいることの素晴らしさを再発見してほしいと話があり、その後、前期課程３年間の皆勤賞の７名の表彰がありました。４月からは４年次生として、一層活躍してくれることを期待しています。

発　行　　兵庫県立芦屋国際中等教育学校
校長　瀬尾　幸司
〒659-0031　芦屋市新浜町１－２
TEL：0797-38-2293 ／ FAX：0797-38-2295
http://www.hyogo-c.ed.jp/~ashiyai-ss/index-j.htm